

演題番号：A7

ポリニューロパチーによる猫の知覚過敏症候群の2例

○長谷川裕基¹⁾，伊藤大志²⁾，松永秀夫³⁾，奥野征一⁴⁾，志賀崇徳⁵⁾，内田和幸⁵⁾，寺尾将司¹⁾，植村隆司¹⁾，小澤 剛¹⁾

¹⁾ KyotoAR 獣医神経病センター ²⁾ 枚方動物病院 ³⁾ ラーク動物病院 ⁴⁾ ACORN 獣医神経病クリニック ⁵⁾ 東大 獣医病理学研究室

1. はじめに：猫の知覚過敏症候群(FHS)は皮膚の痙攣、尾追行動などを主徴とする疾患で、原因として皮膚疾患、てんかん、筋疾患、脊髄疾患、行動学的異常などの報告がある。今回、2症例で、過去に報告がないポリニューロパチーによるFHSと診断した。2症例の長期経過を観察した結果より、FHSの診断法および治療法を検討した。

2. 材料および方法：症例1は雑種猫、2歳4ヶ月齢、避妊雌、3.1 kg。5ヶ月前に散瞳、興奮などを伴うFHSを発症。当初は散発的な発症であり経過観察していたが、緩徐に頻度が増加したため当院を紹介受診した。症例2は雑種猫、2歳11ヶ月齢、5.0 kg。2週間前に突発的な興奮を伴うFHSを発症。メロキシカム投与で改善せず、当院を紹介受診した。

3. 結果：症例1は第1病日に神経学的検査で異常は認められず、FHSの原因精査のためMR検査、脳波検査、トキソプラズマ抗体検査、電気生理学的検査、筋生検を実施した。ポリニューロパチーと診断し、免疫抑制量のプレドニゾロンで治療開始した。治療効果は不十分であり、第93病日からシクロスポリンの併用を開始した。FHSの頻度、重症度は改善し、電気生理学的検査でも改善が認められた。消炎量のプレ

ドニゾロンをEOD、シクロスポリンをSIDで継続し経過良好だったが、第663病日から元気、食欲低下した。全身性抗酸菌感染症と診断され、第697病日に死亡した。症例2は第1病日に神経学的検査で異常は認められず、原因精査のためMR検査、電気生理学的検査を実施した。ポリニューロパチーと診断し、免疫抑制量のプレドニゾロンで治療開始した。治療効果が認められたが、漸減に伴い悪化した。シクロスポリン併用でFHSの頻度、重症度は改善した。プレドニゾロンおよびシクロスポリンを漸減、休薬し、第666病日現在、FHSの頻度は1週間に1回程度で良好に経過している。

4. 考察および結語：過去の報告が確認されないポリニューロパチーによるFHSが診断されたことから、FHSの検査に電気生理学的検査を加えることが有用と考えられた。また、ポリニューロパチーの診断に至ることで、通常FHSに使用されないシクロスポリンの投与を選択でき、症例2の様に用量調節で良好に経過する可能性が示唆された。一方、症例1は治療中に致命的な感染症に罹患したことから、症例を蓄積し、適切な治療プロトコルの確立が望まれる。